Osaka University Knowledge Archive

Title	人間科学における「喚起的」記述の意義と課題 ： オートエスノグラフィー、「自分綴り」の実践から
Author(s)	桂, 悠介; 千葉, 泉
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2021, 47, p. 185-203
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79075
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

人間科学における「喚起的」記述の意義と課題
―オートエスノグラフィー、「自分綴り」の実践から―

桂　悠介・千葉　泉

目　次

はじめに
１．オートエスノグラフィーの二つの潮流
２．喚起的オートエスノグラフィーの可能性
３．学部生、院生にとっての自己の記述
４．大学教員にとっての喚起的記述
５．「信用のおける語り」に向けて

人間科学における「喚起的」記述の意義と課題
―オートエスノグラフィー、「自分綴り」の実践から―

桂　悠介・千葉　泉

はじめに

複雑な人間社会について研究する人間科学においては量的調査から質的研究まで多様なアプローチがある。本稿では、質的研究手法の中で、日本においては十分に理解されているとは言い難い、研究者自身の経験に焦点を当てた「喚起的」な記述のもつ意義を、特にオートエスノグラフィーの文脈から論じる。

2000 年代以降、オートエスノグラフィーを用いた論文の英語圏でのジャーナル掲載数は急増している。オートエスノグラフィーは伝統的な学術的手法とは異なり、書き手の主観性や感情を隠すことなく記述する「喚起的 evocative」なものと、あくまで従来の研究手法の延長として書かれる「分析的 analytic」なものに大別されるが、オートエスノグラフィーを牽引してきたキャロリン・エリスとアーサー・ボクナーが中核に据えているのが、前者の「喚起的オートエスノグラフィー[1)]」である。

日本においても、オートエスノグラフィーを用いた研究が少しずつ増えてきているものの、その多くは分析的なものであり、喚起的な記述はほとんど見られない。このことは、オートエスノグラフィーや研究者自身を対象とする方法のもつ可能性が、いまだ十分に引き出されていないことを意味するだろう。

このような状況を背景に、本稿ではまず、第１章でアメリカを中心としたオートエスノグラフィーの発展、その過程における喚起的オートエスノグラフィーと分析的オートエスノグラフィーの論争を見る。第２章では日本における現状を概観し、あらためて喚起的オートエスノグラフィーのどのような点に可能性があるかを検討する。第 3 章では学部生や院生にとっての、第４章では教員にとっての自己の記述の困難さと意義を見ていく。これらの作業を通じ、オートエスノグラフィーを書くこと自体に躊躇する／させる段階から脱却し、書かれたオートエスノグラフィーをどのように読みうるか、研究という視座において何が喚起されるのかを対話的・共同作業的に探求するという、本邦の人間科学における新たな次元への展望を開きたい。

1．オートエスノグラフィーの二つの潮流

1-1. 自己に関する記述

研究者自身の経験や記憶を主なデータとする研究方法は、今日オートエスノグラフィーとして知られている。論者によって定義は様々であり、明確な定義が避けられることもあるが、例えば「オートエスノグラフィーとは、個人的な経験 (auto) を用いて、文化的なテキスト、諸体験、信念、実践 (ethno) を記述し、解釈する (graphy) 研究手法である」(Adams, Ellis & Jones 2017) と説明される。

1970 年代に人類学者デイヴィッド・ハヤノが「オートエスノグラフィー」という呼称を用いた議論を行い、社会学者エリス＆ボクナーの著作『Composing Ethnography』(1996) やブルデュー研究者リード・ダナハイによる『Auto/ethnography: Rewriting the Self and the Social』(1997) が出版されるなどを機に、オートエスノグラフィーがより注目されるようになった。2000 年 1 月にはフロリダで第一回オートエスノグラフィー国際学会が開催され、2002 年までは年間 5 本以下だったオートエスノグラフィー論文のジャーナル掲載数は、2003 年以降毎年 35 本にまで増加したという (Muncey 2010: 34-35)。

1-2. 批判と論争

2000 年代以降の出版の増加と共に、オートエスノグラフィーは内外から批判されるようになった。最も痛烈な批判としてはデラモント (2007) が挙げられる。デラモントは実証主義的な立場から、あえて論争的な主張をする、ということわりを入れたうえで、「オートエスノグラフィーは本質的に怠惰 (lazy) である。文字通りの怠惰であり、知的に怠惰でもある」と述べている。では、どのような意味で「怠惰」だというのだろうか。デラモントは、次の六つの点でオートエスノグラフィーを批判している。1. 馴れ合いに対抗できないというデータとの距離、2. 同意は得られているのかという倫理的問題、3. 経験しかなく分析的ではないという方法論的問題、4. 研究者自身ではなく社会を研究すべきだという研究対象、5. 社会学が向けるべき弱者ではなく強者へ焦点を当てているという対象の選定、6. 外へ出て未来に残る仕事をするべきという研究者の役割である。

デラモントの批判と同時に、オートエスノグラフィーを採用する研究者どうしの議論も活発になっている。その中心にあるのが、エリス＆ボクナーが牽引し、それまで中心であった感情や主観性の記述を厭わない「喚起的オートエスノグラフィー Evocative Autoethnography」に対する批判である。

アンダーソン (2006) は、「これまでのオートエスノグラフィーは喚起的なものばかりであった」とし、より慣習的な観点からも受け入れやすい「分析的オートエスノグラフィー Analytic Autoethnography」を提唱している。分析的オートエスノグラフィーの前提としてアンダーソンは以下の 5 つの条件を研究者に課している。それは 1. 研究対象の「完全なメンバー (Complete Member Researcher)」であること、2. 自己の研究の状況と影響に

自覚的であること（分析的再帰性）、3. メンバーとしての研究者自身の語りがテキストに明確に現れていること、4. 自伝にならないよう他のインフォーマントの声を入れること、5. 経験的データをより広い理論につなげること、である。

アンダーソンの論文は前述のデラモントの論文より先に出版されたものではあるが、これらの条件はデラモントの批判に概ね対応している。このような分析的アプローチは、主観的な記述を拒否する実証主義者にも受け入れられやすく、また従来の民族誌ともより親和性が高い。

一方でエリス＆ボクナーは、アンダーソンの論文に対し、理論化を前提とした分析的視点や条件付けは、豊かな感情を含み、ケアと共感、社会的実践を目指すオルタナティブな方法論としてのオートエスノグラフィーの可能性を損なうのではないかと危惧を示している (Ellis & Bochner 2006)。エリスは分析的オートエスノグラフィーからの批判を踏まえて、改めて主観性や感情を重視する喚起的な記述について、

> 喚起的な物語は主観性を活性化し、感情的な反応をもたらす。それは分析ではなく、使用され、理論化され決着をつけるのではなく、語り継がれる。議論の余地のない結論ではなく、さらなる会話のための学びを提供し、抽象化された孤立した事実の代わりに、親密な細部と共にあることを望んでいる。(Ellis 2008 :50)

と、理論化や抽象化を目指した分析的な記述とは異なる目的をもったものとして提示している。

このような2000年代の論争を経て、2010年代にはオックスフォード出版やRoutledge、Sageなどからオートエスノグラフィーについての多数のハンドブックが出版され、方法論として定着していった。同時に、複数のオートエスノグラフィーを統合的に論じる「メタ・オートエスノグラフィー Meta-Autoethnography」(Ellis 2008) や、共同で執筆する「協同的オートエスノグラフィー Collaborative Autoethnography」(Chang, Ngunjiri & Hernandez 2103) といった方法論的な発展も見られる。

以上、ここではアメリカを中心とした英語圏のオートエスノグラフィーの展開について概観した。次項では、この方法論の日本における受容について述べる。

２．喚起的オートエスノグラフィーの可能性

2-1. 日本におけるオートエスノグラフィーの受容

日本においても、オートエスノグラフィーはエスノグラフィーの一種として紹介され、実践されるようになってきている。

2006年に邦訳が出版されたN・K・デンジンとY・S・リンカンの編集による『質的研究ハンドブック第3巻』では、エリス＆ボクナーによるオートエスノグラフィーへの

導入論文が掲載されている他、2013 年に出版された藤田・北村編『現代エスノグラフィー』でも「さまざまなエスノグラフィーの中で最も自由で実験的な研究アプローチ」として紹介された。また、2019 年のサトウ・春日・神崎編『質的研究法マッピング』では「近年、社会学や心理学においても注目を集めつつある（…）質的研究の一つの形態である」とされ、エリス＆ボクナーを中心としたオートエスノグラフィー論に加えて協働的なアプローチの一つとして「対話的オートエスノグラフィー」の可能性が示唆されている。実際に執筆者の沖潮（原田）は、障がい者の家族という立場から対話を行いながらオートエスノグラフィーを著している（沖潮［原田］2016）。

このように日本では、英語圏で出版されているようなオートエスノグラフィーのみの教科書はないが、質的研究方法の一つとして紹介されてきた。

学術論文では、演劇教育研究（花家 2012）、教育学（近藤 2016、小山 2017、清水 2019、班目 2019）、保育研究（岡田・中坪 2008, 濱名 2018）、ジェンダー研究（町田 2018, 冨安 2019）、経営学（伊藤 2015, 簾 2018）など近年複数の分野で採用されている。日本文化人類学会では 2018 年の大会でオートエスノグラフィーの分科会が行われた。また、オートエスノグラフィーとインタビューを方法とするリーペレス (2020) の単著が刊行されるなど、本邦においても徐々に方法論として定着しつつある。

2-2. 日本における喚起的な記述の欠如

このように、日本においても研究者自身の経験や主観性に着目する研究が増加してきている。ただし日本で公開されるオートエスノグラフィーを見ると、「分析的」なもの、研究をめぐるコンテクストを含む再帰的エスノグラフィー、あくまで研究対象者の一人として研究者が位置づけられたエスノグラフィーなど、研究対象のカテゴリーが予め決まっている形式のものが多い。その背景には、エリス＆ボクナーのような主導者がいないことや、日本の学界において未だ喚起的記述の意義が十分に理解されていないことが挙げられる。

国内での既存のカテゴリーからはみ出る部分も含む、自伝的な自己の経験そのものを対象とした喚起的な記述としては、社会学者の岡原らがエリス＆ボクナーと同時代的に、オートエスノグラフィーやパフォーマンスを取り入れた「感情の社会学」が挙げられる（岡原編著 2014）。しかし同様の指向性をもつ研究蓄積は未だ少なく、その影響は限定的である。日本で比較的早くからオートエスノグラフィーに取り組んできた演劇研究者の花家は、「（英語圏では）オートエスノグラフィーそのものを何の注釈もなく提示することもあり、そのオートエスノグラフィーが短い詩の形式を持っているようなこともある」が、日本では 2010 年代に入ってからも「従来の学術研究のスタイルからするとまだ簡単には受け入れられないかもしれない」という危惧を述べている（花家 2012：44、補足引用者）。同論文では現状をふまえ説明的（分析的）な記述を付けているが、オートエスノグラフィーの定着と共に不要になるのではないかとの期待も述べられている。

それでは日本においてどのようにオートエスノグラフィーは定着しうるのか。オートエスノグラフィー、特に喚起的な記述の意義や意味は、読み手との共同作業で理解されていくものである（エリス＆ボクナー 2006:142,148）。したがって、既に多く論じられてきた英語圏での意義や課題を参照するだけでなく、実際に記述し、互いに読み、対話するといった実践の蓄積が今後必要だろう。そこで次章以降、そのような実践の試み、対話によって生み出された知を共有していく。

３．学部生、院生にとっての自己の記述

私（桂）が所属する研究室やゼミでは、自己と関わりの深い卒業論文や修士論文を書きたいという声がしばしば聞かれる。そこで私は、参加者を募り ZOOM を用いたオンラインワークショップを企画した（2020 年 6 月から 8 月に計三回、一回 2 時間程度）。毎回私がオートエスノグラフィーについて少し紹介するとともに、参加者が書いてきた自己に関する記述を持ち寄り、コメントをすることで考察を深めた。各回とも、学部生、院生、非常勤講師や助教、十名前後の参加があった。以下、参加者にとってのオートエスノグラフィーへの関心を通して、学部生や院生にとっての喚起的記述の意義や困難さをみる。

3-1. 参加者にとってのオートエスノグラフィーの意義

（１）経験のオルタナティブな記述

それぞれの参加者は様々な経験や当事者性、あるいは当事者性をめぐる戸惑いを背景に、オートエスノグラフィーに関心を持ちワークショップに参加している。

例えばかつて「在日ブラジル人」という当事者性を背景に、研究対象となったことがある参加者の一人は、研究者の記述と研究対象者としての自己の感覚のズレという経験から「そもそも学者が書いてることって本当なの」という疑問をもった[2)]。そこで何らかの「違う視点」を提示しうるものとしてオートエスノグラフィーに関心を持ったという。

会では参加者の既刊論文を取り上げ、自己の経験を基盤とした論文執筆の動機を聞いた。研究対象者と研究者自身の関係性そのものを対象とした論文[3)]を執筆した院生は、自身を含むゲイ同士の「関係の複雑さ」があるため「自分自身について書いた方が良」いと考えたのだという。また、二年間の海外で日本語教師を務めた経験のある参加者は、教員の役割をテーマとした修士論文[4)]で、「一番誠実なトピック」として自身が「一番不安だったことを書こう」と決めたため、他者へのインタビューなどではなく「自分の言葉で書くしかなくなった」と話している。

それぞれの当事者性を背景に、既存の研究方法や言説への違和感や、不十分さを感じたことが、オートエスノグラフィーへの関心に繋がっているといえる。

（2）葛藤をも含む研究資料やプロセスの共有媒体としての可能性

一方、当事者性をめぐる問い、当事者でも研究者でもあることへの葛藤もしばしば話された。自己の経験の記述は、こうした葛藤をも含む研究の資料やプロセスを共有する媒体という面もある。たとえば在日ブラジル人という。当事者性をめぐるとまどいを「自分のための資料として書いた」という語りがあった。他の参加者にとっても、自己の経験の記述は研究成果としてだけではなく、研究主体のポジショナリティの確認や、対象との関係性の自覚など、研究計画や論文執筆に向けた準備段階としての意義も持ちうるものと位置づけられていた。

（3）他者の実践への繋がり

次に見えてきたのが、自己の経験の記述が、アカデミズム内外での新たな実践を触発するという可能性である。

海外での日本語教師の経験を記した参加者は、論文の目的を類似の経験をもつ者と「いかに繋がるか」、「お互いにエンパワーメントし合う」ことに置いており、今後自身の記述を研修等で共有していきたいと述べる。この共有は、海外での実践における孤立を防ぐばかりでなく、インタビューに代表される典型的な研究に対して、言いたいことがあるのであれば「自分で研究したらいいんじゃないかっていう、そういう方法論上の異議を申し立て」ることへも繋がっていくことが目指されている。

他にも、「結局は解決したいのは僕の問題というよりかは、在日ブラジル人の問題」であり、自己の経験を記述した研究を通して「他のブラジル人も行動してくれる事が僕は一番何か望んでる」と、他者によるさらなる実践への触媒的役割を果たすことを期待した声が聞かれた。

3-2. 自己の記述の困難さ：指導による委縮

このように学術的、実践的意義を持ちうるとしても、参加者たちの多くはオートグラフィーを用いる論文の執筆過程で、「このままだとエッセイでしょ」「この論文はアカデミックじゃなくてジャーナリズムでしょ」「論文にはならない」「今はとにかく型にはまりなさい」等の指導をされた経験を有していた。本稿で特に焦点を当てる喚起的な記述か否かに関わらず、自己を対象とした時点でその意義が吟味されないままに棄却されてしまう。こうしたコメントは、たとえそれが現状における学術的な「常識」を伝えるものであれ、とくに教員から学生への「指導」としてなされる場合、抑圧的に働き記述実践を行う障壁となりうる点に、注意を喚起しておきたい。

3-3. 記述における困難さ

ワークショップでは、「指導」という障壁以外に、実際に記述する段階での困難さも話

された。その困難さは、大まかには（1）過去の自分をいかに書くか（2）データとの距離（3）自己へのケア（4）創作との関係（5）加害可能性と客観的視点の必要性をめぐるものであった。

（1）過去の自分をいかに書くか

たとえそれが自分自身の経験であったとしても、過去の記述は困難を伴う。ある参加者は、「どんな文才があっても文章には限界がある」ため「これは自分ではないと悩むのか、自分の一部ではあるし、と納得するのか」、「限界との折り合いをつける」ことの難しさを述べた。たとえば「書きながら過去と現在がどんどん線引きされ」ていくため、「文末を現在形にするか過去形にするか」が問題として感じられたという。

（2）データとの距離

過去の記述の困難さは、記述におけるデータと書き手の近さを反映したものだと考えられる。自己の経験の記述そのものが、さらなるデータ（記憶）につながりプロセスの終結点が捉えがたい。このようなデータとの距離の近さを、ある参加者は「自分が書いて分析していく中で分析が終わらない」と語っている。このようなデータとの距離の近さや、分析の継続性に関する困難さは、（1）の、記述に区切りをつけてしまうことへの葛藤やとまどいと表裏一体であるように思われる。

（3）自己へのケア

他の質的研究でも見られるが、オートエスノグラフィーを用いる研究では、とりわけ書き手自身と問題関心が直結しているため精神的、心理的な負担が生じるという事態が生じやすい。参加者の一人は、現在の研究計画として、自身の過去の抑圧的な経験について記述すると同時に、抑圧した側の人にもインタビューを行おうと考えているのだと話した。これを受け、オートエスノグラフィーではないものの当事者性の高い研究を行った経験のある別の参加者は、研究を進める中で、自身の過去が否定されるようなインタビューデータが得られたことにより、「よく帰りがけには泣きながら帰った」のだと述べた。

（4）創作との関係

ある参加者は、（1）で述べたような複雑な感情や状況を表す困難さに対し、「登場人物で表現」することができ、何を表現しても良いと思え、より円滑に記述することができる小説という形式で記述している。創作を用いることについては「世界を客観的に見た時の気づきっていうものを、ちゃんと相手に伝えられるのか」という疑問も提出されたが、執筆者は、確かに「よくわからないと言われる」ことがあるとしたうえで、小説だからこそ「手にとろうと思う人、最後まで読んでくれる人、読み進めることがしんど

くない」場合もあるという利点を述べている。

（5）加害可能性と客観的視点の必要性

想定される読み手が通常の論文よりも広いことから、オートエスノグラフィーの持ちうる加害可能性や、主観的記述に対する客観的視点の必要性が話し合われた。

今なおオートエスノグラフィーで記述されたものと類似の経験に苦しむ読み手にとっては、問題を乗り越えた（かのように見える）当事者の記述が負担となる場合もありうるため、記述を客観化してみたうえで「もう一回（オートエスノグラフィーに）戻ってくる、移動が必要」ではないかという指摘がなされた。

このような加害可能性は、アカデミズム内に限定されない実践に繋がる可能性を持つがゆえに生じるとも言える。広く開かれた記述を目指すのであれば、研究者だけでなく今なお苦しみのさなかにいる当事者自身を読み手として想定し、自己の記述がどのような影響を与えるかを極力自覚し、また聞き取ろうとする必要がある。

3-5. 学部生、院生にとっての自己の記述の意義と困難

オートエスノグラフィーの書き手としての学部生や大学院生にとって、オートエスノグラフィーは、既存の研究とは「別の視点」の取り入れ、葛藤をも含む研究資料やプロセスの共有媒体としての存在可能性、他者によるさらなる実践への触媒的役割と同時に既存のアカデミズムへの異議申し立て役割を果たしうるといった意義をもちうる。

一方、読み手との関係性のなかでは、大別して二つの困難さが認められた。一つは、書き手自身を含む読み手との間に生じる、記述における困難さであり、もう一つは、指導教員という読み手との間に生じる、研究として記述を取り入れることの困難さである。

記述における困難さについては、オートエスノグラフィー研究以外の文脈も含め多くの先行研究において、重なる指摘やそこからの考察が見られる。ここでは紙幅の都合で立ち入ることはできないが、今後より詳細に検討していくことが可能だろう。

本稿では、従来の形式にそぐわないオートエスノグラフィー、特に喚起的な記述を研究に取り入れることの困難さの焦点をあてる。この困難さの背景には、オートエスノグラフィーの書き手としての学部生や大学院生は、人間科学共同体においては新参者というポジションにおり、共同体で構築されてきた規範や「型」の習得がまず目指され、その規範から外れた方法をとりづらいという状況があった。そこで次章では、人間科学共同体の長年のメンバーであり「型」を既に習得した者としての教員にとっては、自己を記述する困難さはどのように立ち現われ、あるいは乗り越えられるのか、また記述の結果、どのような意義が感得されているのかを確認していきたい。

4．大学教員にとっての喚起的記述

本章では、大学教員が喚起的な記述を行うことの意義について、わたし（千葉）の事例に基づいて検討する。

わたしは2020年3月に「自分綴り」として書いた『”研究者失格”のわたしが阪大でいっちゃんおもろい教授になるまで：弱さと向き合い、自分らしく学問する』を出版した。その内容や執筆のプロセスは「喚起的オートエスノグラフィー」の意義を色濃く反映しているため、本章ではこの著作を事例として取り上げるが、適宜「自分綴り」という表現も用いる。

以下、わたしが喚起的な「自分綴り」を書いた経緯と理由、執筆を困難にした「学術的手続き」の障壁、「温かい他者」による支援、執筆の個人的な意義、そして作品が読者に及ぼす影響を見ていくことで、大学教員にとっての喚起的記述の意義を示唆する。

4-1. 執筆の経緯と理由：「苦悩」するわたしが「自分を綴る」

まず、大学教員であるわたしが、なぜ通常の学術論文とは大きく異なる「喚起的な自分綴り」を執筆したのか、その経緯と理由を説明したい。

2020年の4月から半年のサバティカル期間を取得し、過去30年の研究成果を踏まえた著書を執筆することにした。だが、当時わたしは大きな苦悩（二度目の鬱）の真っただ中にあった。高校生の時に視力の困難を抱え、それ以来、本や論文など「近くの文字を読む」ことは常に苦しい作業となった。三十歳の時に手術を受け、その後何とか研究や教育をこなしてきたが、その後も視力は悪化し続けた。意を決して手術を受けたが、逆に角膜の凸状態が強化され、症状は更に悪化した。今や単なる読書が「絶望的な苦行」と化し、極度の落胆と先行き不安から鬱に陥ってしまったのである。

身体的困難という厳然たる現実を前に、連日「苦しい」、「死にたい」、「辞めたい」としか思えない状態だった。そのため、通常なされるように大量の参考文献を参照したり、新たに現地調査に赴いてデータを入手し、分析や考察を加えることなど到底不可能だった。唯一できそうなのは「自分綴り」だった。「苦悩するわたし」の視点から、自分の道のりを、その時々の感情も含めて開示する。そういった文章なら書けるかもしれない…。

4-2.「学術的な手続き」というルールの障壁

だが、わたしの前には「学術的な手続き」のルールという大きな壁が立ちはだかっていた。いくら体調が悪いとはいえ、大学教員の自分が、単に「自身の道のり」をテーマに、感情や主観に満ちた文章を書いてもいいのだろうか？

人間科学の領域において「型」となってきた、未だ根強い伝統的な実証主義のルールを意識していたわたしは、「自己語り」の社会学、当事者研究、オープン・ダイアローグ、音楽療法など、自分綴りと関連しそうな先行研究をいくつか読んでみた。困難を抱えて

いたためわずかな分量しか読めなかったが、個人的な経験から得ていた学びが、いろいろな分野での成果と重なるところもあり、ささやかな安堵感も得られた。だが、それ以上読み進めることは、肉体的・心理的に不可能だった。どうしたらいいのか？

4-3.「温かい他者」による承認：社会的行為としての「自分綴り」の執筆

わたしの背中を押してくれたのは、同じ人間科学研究科の先生方だった。

南米チリの研究過程でわたしが修得した幼児葬礼の歌（千葉 2020:79-85）に感銘を受けられた岡部美香先生は、この歌をテーマとする「コンポジウム 」を企画し、協働する機会を与えてくれた。お会いするたび、先生は「既存の研究は気にせず、これまでのさまざまな実践をまとめて著作を書かれたらいいのでは？」という助言をくださっていた。

文理融合的なアプローチで自然と社会の調和に関する研究に従事し、音楽的資質を活かせる授業をデザインしてくださったり、困難に直面した時に励ましてくださってきた三好恵真子先生は、今回の執筆に際しても、筆者の研究や授業は「既成的な論理からは考えつかない学術的・教育的な魅力を発していて、関わった人たちに寄り添えるという強み」があると評価してくれた。

そして、数年前に研究科の忘年会で演奏した際、声をかけてくださった稲場圭信先生の「利他主義」関連のプロジェクトでは、自作の震災復興支援歌を地元の人々とともに歌う機会を与えてくださった。「きっと多くの人を励ます本になります！」という力強いコメントをくださった先生は、その後も相談させていただくたびに、「先行研究を気にしていたら、千葉先生の良さがなくなってしまいますよ」と、「学術的体裁」に縛られそうになるわたしのこころを解き放ってくれた。

同僚の先生たちが、「わたしのあり方」を受容してくれた上で、伝統的なルールの順守を迫ることなく「自分綴り」を応援してくれた。そのような、いわば「温かい他者」の承認を受け、ようやく「喚起的な自分綴り」の執筆を決意することができたのである。

4-4.「喚起的自己綴り」の個人的意義—自己の再構築と癒し

「学術的な手続き」のルールから解放されたわたしは、パソコンの「文字拡大機能」に助けられながら、数ヵ月の時間をかけ、これまでの自分の歩みを綴っていった。

幼少期から大学生時代に至る生い立ち、両親の「洗脳」的教育で迷い込んだ学術世界、試行錯誤しつつ編み出した「自分らしい」研究・教育・社会実践の方法、音楽活動、そして視力の問題、勘当、50 歳代で患った一度目の鬱…。被抑圧、失敗、挫折などネガティブな体験も含め振り返り、当時抱いていた感情や現在の認識も織り込みながら、詳細かつ赤裸々に書き連ね、開示していった。

執筆を進めるにつれて、過去の複数の経験の間にあるつながりや、過去の出来事が現在の自分の心理、認識、行動に及ぼしている影響、連関が明らかになっていった。たとえば、現在実施している授業では、受講生が相互に深く「自分語り」を行うことで参加

者間にポジティブな変容がもたらされる。考察を深める中で、私自身の過去の経験、外国人の妻との結婚を理由とする勘当や鬱などから学んだことが、語り合い実践の哲学的背景を構成していたことがわかった。

次に、数年に及んだ一回目の鬱に陥ったいきさつや原因、回復期について綴りながら、この件に関する認識の変化に気付いた。記述により、一回目の鬱の時期に行った、数十の歌の制作に付随する多様な作業（創作、演奏・録音、他者との共有）がわたしに、個人的および集団的な形で、波状的な「癒し」をもたらしていたことが明確になった。

形式に縛られずに書き進めるうちに、スタイルの面でも独自な工夫を思いついた。音楽の活用である。文章による記述に歌（歌詞・音楽）を加えることで、言語化しがたい思いを含め、わたしの経験をより豊かに表現できるのではないか？結果的に「聞きながら読んでもらう」という多次元的な鑑賞スタイルが生まれた。

このような、執筆の過程で得た「自己の再構築」の兆しと「癒し」。これが、一人の「苦しむ人間」として、「自分綴り」を作成することで、わたしが実感した喚起的記述の個人的な意義である。

だがそれは、「温かい他者」が「ありのままのわたし」を受け入れてくれて初めて可能となったものであり、本著は、執筆の時点ですでに「社会性」を帯びていたといえる。次節では、そのような執筆のプロセスに加え、喚起的な記述の結果、立ち現れる「社会性」について述べる。

4-5. 作品としての「喚起的オートエスノグラフィー」の社会的意義

程度の差こそあれ、大学教員は上述した「学術的手続き」を意識しているであろう。ここでは、読み手としての教員の感想を通して、喚起的記述の持ちうる社会的意義について見ていこう。

若手研究者である助教の西徳宏先生は、筆者との出会いを含めたコメントを寄せてくれた。当時大学院生であった西先生は「待ち受ける数々の業績評価。体裁を取り繕うそばからボロが出る毎日。鉛のように心身が重い」と感じていた。そんな折「『鬱なんです！』『死にたくてやばいんです！』と声をあげ，ラテンベースのオリジナルソングを，大きなラジカセから爆音で披露」していたわたしは、西先生には「既成概念としてあったクソッタレな大学像をぶち壊した，まさに“Rock 'n' Roll”」として映っていた。一方、本作に綴られていたのは「『弱い』自己像」であった。西先生は「本書が喚起したのは，『弱さ』を理解し共有することで築かれる人間的な共生学のコミュニティ」であるとし、「このコミュニティの存在が，評価と査定に満ち満ちたクソッタレな大学界の中で，唯一の希望として私には輝いて見える」とまでコメントしてくれている。自分の「弱さ」を隠さずに記述したことが、読み手としての教員の意識にも影響を与えていることがわかる。

長年学術界に身を置き、それぞれ専門分野で重厚な成果を築いてきた教員の場合はどうだろうか？綿村英一郎先生は、喚起的オートエスノグラフィーがなぜ『自己受容』と

いう効果を持つのか」という観点から、「本書を読んだ私なりの考えとしては，自己評価を下げてしまう失敗，苦難，コンプレックスなどの影響を自己概念の整理と客観化が緩和するからではないか」と指摘してくれた。さらに、「被災や事故など不幸な体験をされた人たち」の「手記」を想起された綿村先生は、教員としてのわたしだけではなく、「自責の念にとらわれ，ネガティブな自分と対峙する」ことのある人たちにとっての、自己の記述を通した「自己受容」のより一般的な意義を特筆している。

「『自分語り』やカウンセリングというテーマに関心のある」野村晴夫先生にとって私の著作は「珍しい本」であるという。「専門性と日常性，文字と音楽，個別性と公共性といった対照的な性質を一冊の本が兼ね備えている」からである。しかし重要なのはそのような「論評的な物言い」ではなく「より幅広い読者の『自分語り』」へと繋がりうることだという。野村先生は、「残念ながら私にはまだその『自分語り』を人に語る準備がありません」としながらも、「人に語るまで至らずとも，内なる『自分語り』を喚起されたところが，一読者としての私の大きな収穫」だという感想を伝えてくれた。

わたしの著作から浦河べてるの家を起点とする当事者研究を想起された村上靖彦先生は、「一人当事者研究」で言うところの「自己病名『学者病』〔注：学者にならなければという思いにとらわれて好きなことができなくなってしまう苦労〕をもつ著者が、「『おりる生き方』を自覚し」、楽になったことで、記述は「(精神科医療で言うところの)『リカバリー』の記録となっていく」と指摘された。こうした感想のやり取りの過程においても、村上先生は「僕自身病の経験はないですが、自分の家族の背景がありつつ巻き込まれるタイプのフィールドワークをする」ため、「研究と人生の関係」というプロセスを記したわたしの著作が「自分を照らす鏡となりました」と追加のコメントをくださった。

さらに「著者の授業において今度は学生が聴き取りと語りの力を回復するプロセスと円環をなす」という村上先生のご指摘を裏付けるかのように、学部生の小林真実さんも、筆者の著作や自分綴りの授業を通して、自身が「ここ数年もがき苦しむ中で体得した」、「本当の自分に還ること」を再び経験したという感想を寄せてくれた。

当初は不安と、苦悩の中で書き始めたが、このような読み手からのレスポンスをうけ、個人的な経験や弱さ、感情の記述には、筆者であるわたし自身の「自己再構築」や「癒し」にとどまらない意義があることを実感した。

確かに主観性を重視する喚起的記述に、伝統的な意味での普遍性はないのかもしれない。しかし、その影響は、単に「個人」という単位で終わるわけでもない。その記述は執筆の過程において既に対話の契機となり、執筆の結果もまた、深い実感を伴って伝わるからこそ、学術界に身を置く教員も心を揺さぶられる。学術的なルールをいったん横に置き、自分自身の個別的な主観的真実を赤裸々に書き切ることで、読者も、これまでの自身の経験や道のりの省察、「一人の人間」としての自身のあり方や生き方の「問い直し」へと自然に誘われるのだろう。この意味において、喚起的オートエスノグラフィーの執筆は、すぐれて「社会的な行為」だといえる。

5．「信用のおける語り」に向けて

以上、今日の国内の研究における事例として、人間科学共同体における学生と教員にとってのオートエスノグラフィー、喚起的な記述の意義や困難さを見て来た。

第２章では欧米の文脈ではその意義が認められてきた喚起的な記述が、日本では未だ限定的にしか実践されず、オートエスノグラフィーの可能性が十分に引き出されていないのではないかと指摘した。第３章ではワークショップの参加者による語りから、学部生や院生が既存の研究とは「別の視点」を反映させうる方法や、実践に繋がるものとしてオートエスノグラフィーに期待を寄せているということが認められた。一方で、記述自体の困難さを感じていることや、まずは「型」にはまるべきであるという指導が、研究方法として取り入れることの障壁となっていることが示された。続いて第４章では、千葉の記述から、大学教員であっても一度身に着けた「型」を相対化することは難しく、純粋な学術論文ではない著作の執筆に対しても制約となっているということが論じられた。ただし、一度その「型」を脇に置くと決めた後には、「創作」を伴う記述の豊かな可能性が開かれた。その結果、読み手となった他の教員や学生の自己の経験の語りや記述へと繋がっていく。このように喚起的な記述は時に創作を取り込みながら、書き手と読み手に重層的な影響を与えるという個人的、社会的な意義がある。

しかしながら、伝統的な「型」は未だ根強く、教育を通して院生や学部生に内面化されることで、多くの場合、記述の重層性や豊かさは学術的な研究から排除されていく。喚起的な記述に個人的、社会的な意義があるのであれば、このような内面化された伝統的科学観を乗り越えていくことが課題として挙げられるだろう。

改めてエリス＆ボクナーの語りをみてみよう。ボクナーは従来の「型」を支える、明確な論拠や抽象的な概念、理論、洗練された専門用語こそが重要であるという「前提やメタ・ルール」を疑う必要性を強調した上で、次のように問いかける。

> なぜ、私たちの研究が、個人にとっての癒しの価値をもったなら、恥ずべきなのでしょうか？問題は、私たちは自分のバルネラビリティや主観性をテクストの中で明確に表現すべきなのか、それともそうしたものを「社会分析」の背後に隠すべきなのか、という点にあるのです。（エリス＆ボクナー 2006:145）

研究者自身の傷つきやすさや主観性を隠すことなく記述することで、「人間らしく、また信用のおける語りになる」（同 :147-148、傍点引用者）のだという。

本稿におけるワークショップ参加者の語りの多くや千葉の記述は、エリス＆ボクナーやその他の論者の議論を受けてのものではなく、自らの経験から生まれたものであった。しかし、そこでの語りや記述は、エリス＆ボクナーが牽引してきた喚起的オートエスノグラフィーと重なるものであった。

自己の経験が記述され、読まれ、語られることで、複雑な社会における重層的な自己の在り方が理解されていく。書き手と読み手との相互作用は、さらに新たな語り、記述や実践へと繋がっていく。その際、記述自体の困難さや加害可能性に自覚的かつ誠実であれば、喚起的な記述は「信用のおける語り」となり得るだろう。いわゆる文系分野に対する社会的評価の低迷という状況において、そのような「信用のおける語り」を行うことは非常に大きな意味を持つことになる。

今後の課題は、本稿で見たような喚起的なオートエスノグラフィーや感情を含む記述の意義や問題点を国内外の議論と接続しつつ、実際にその記述に取り組んでいくことであろう。いわば従来の学術的研究とは異なる、日本の文脈における一つの「型」としての喚起的な記述の模索である。われわれの研究が「信用のおける語り」となるためには、書き手は自己の経験を通した喚起的記述を行う意欲があるのであれば、それを抑圧するのではなく、また読み手は「温かい他者」として、まずはその記述を受け入れることが必要なのではないだろうか。もちろん筆者らは、なんでも書ける（書いてよい）ということを主張したいのではない。記述の意義や、学術的な妥当性は書かれること、読まれることを通して初めて理解されていく。インタビューや他の方法と組み合わせて用いられるにせよ、主な方法として採用されるにせよ、喚起的な記述はそれまで排除されていた視点や内容を含む研究を現実化し、人間科学の在り方を拡張、刷新していく可能性を持っているのである。

注

1）人文社会科学における「喚起的」記述は相互に関連する二つの文脈で用いられる。一つは社会学を中心にエリス＆ボクナーが推進してきた、「分析」に対置される使い方であり、もう一つが、人類学を中心に影響を与えてきた『文化を書く』において、スティーブン・タイラーが提唱した、「表象」に対置される使い方である。本稿では主に前者の意味で用いるが、両者の関係性ついてはまた稿を改めて検討したい。

2）この時の経験は大川 (2020) に詳しく書かれている。

3）冨安 (2019)

4）斑目 (2019) として公開されている。

引用文献

Adams, T.E., Ellis, C. and Jones, S.H. (2017). Autoethnography. In The International Encyclopedia of Communication Research Methods (eds J. Matthes, C.S. Davis and R.F. Potter).

Anderson L. (2006), Analytic Autoethnography, Journal of Contemporary Ethnography, Vol.35-No.4, pp.373-395.

Chang H., Ngunjiri F. and Hernandez K.C. (2013), Collaborative Autoethnography, Left

Coast Press and Routledge.
Delamont, S. (2007), Arguments against auto-ethnography, Qualitative Researcher, Issue.4, pp.2-4.
Ellis C., Bochner A.P. (1996), Composing Ethnography: Alternative Forms of Qualitative Writing, Rowman Altamira.
Ellis C., Bochner A.P. (2006), Analyzing Analytic Autoethnography: An Autopsy, Journal of Contemporary Ethnography, Vol.35-Issue.4, pp.429-449.
Ellis C. (2008), Autoethnography. In The SAGE Encyclopedia of Qualitative Research Methods (eds L.M. Given).
Ellis C. (2008), Revision: Autoethnographic Reflections on Life and Work, Routledge.
Muncey T. (2010), Creating Autoethnographies, SAGE Publications Ltd.
Reed-Danahay D.E. (1997), Auto/ethnography: Rewriting the Self and the Social, Berg Publishers.
伊藤精男 (2015),「人材育成研究における「自己エスノグラフィー」の可能性」, 九州産業大学経営学会編『九州産業大学経営学会経営学論集』第 25 巻第 4 号 , 25-43 頁
エリス、キャロリン・ボクナー、アーサー (2006)「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」N. K. デンジン，Y. S. リンカン編 , 平山満義監訳 (2006),『質的研究ハンドブック３巻 : 質的研究資料の収集と解釈』, 北大路書房
大川ヘナン (2020),「往還しなかった人」, 大阪大学人間科学研究科附属未来共創センター編『未来共創』7 巻 , 336-338 頁
岡田たつみ・中坪史典 (2008),「幼児理解のプロセス：同僚保育者がもたらす情報に注目して」, 日本保育学会編『保育学研究』46 巻 2 号 , 169-178 頁
岡原正幸編著 (2014),『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』, 慶應義塾大学出版会
岡部美香・千葉泉・稲場圭信・中道正之・栗本英世・中山康雄・山田一憲・上林梓・新谷真美子 (2015), 「人間科学による一つの狂詩曲：人間科学研究科による利他コンポジウムの報告」『未来共生学』4、３５７-３８５頁。
沖潮 (原田) 満里子 (2016),「障害者のきょうだいが抱える揺らぎ：自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し」, 日本発達心理学会編『発達心理学研究』27 巻 2 号 , 125-136 頁
小山聡子 (2017),「質的研究方法において研究者が自己を語ることの意味と位置：授業研究を通して」, 日本女子大学社会福祉学科編『社会福祉』58 号 , 69-83 頁
近藤百玲 (2016),「主体的問題解決のための思考過程の解明の試み：自己エスノグラフィを通した探索的検討」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻編『教育論叢』59 号 , 19-34 頁
サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編 (2019),『質的研究法マッピング：特徴をつかみ、

活用するために』, 新曜社
清水克博 (2019),「『実践的研究者として教師』の資質形成を図る過程についての検討 : 自己エスノグラフィーによる初任期の教育実践記録の分析を通じて」, 金城学院大学編『金城学院大学論集 社会科学編』15 巻 2 号 , 23-41 頁
タイラー、S.A. (1996), 「ポストモダンの民族誌」ジェイムズ･クリフォード，ジョージ･E・マーカス編　春日直樹、足羽與志子、橋本和也、多和田裕司、西川麦子、和邇悦子訳『文化を書く』, 紀伊國屋書店
千葉泉 (2020),『“研究者失格 " のわたしが阪大でいっちゃんおもろい教授になるまで : 弱さと向き合い、自分らしく学問する』, 明石書店
デンジン、N.K.・リンカン、Y.S. 編 , 平山満義監訳 (2006),『質的研究ハンドブック 3 巻 : 質的研究資料の収集と解釈』, 北大路書房
冨安皓行 (2019),「現代日本におけるゲイの親密性の探求：性的／非性的な関係の二分法を超えて」, 大阪大学大学院人間科学研究科『共生学ジャーナル』編集委員会編『共生学ジャーナル』3 号 , 26-53 頁
籏康之 (2018),「病院組織における経営マネジメント職の人材開発：人材の差異化促進へ向けた今後の展望」, 新潟大学大学院現代社会文化研究科編『新潟大学大学院現代社会文化研究科』66 号 , 201-218 頁
花家彩子 (2012),「演劇経験を教育的に評価するための研究方法としてのオートエスノグラフィーの可能性」, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科編『学校教育学研究論集』25 号 , 85-98 頁
濱名潔 (2018),「保育研究における自己エスノグラフィーの可能性と課題：課題を解決する工夫としての日記と TEM の活用」, 広島大学大学院教育学研究科編『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域』67 号 , 99-108 頁
藤田結子・北村文編（2013）,『現代エスノグラフィー : 新しいフィールドワークの理論と実践』, 新曜社
斑目貴陽 (2019),「選択外国語としての日本語教育現場における教師の役割意識の構築 : ロシアの大学における教育実践より」, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻編『日本語･日本文化研究 = Studies in Japanese language and culture』29 号 , 177-191 頁
町田奈緒士 (2018),「関係の中で立ち上がる性：トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討」, 京都大学大学院人間・環境学研究科編『人間・環境学』27 号 , 17-33 頁
リーペレス ファビオ (2020),『ストレンジャーの人類学 : 移動の中に生きる人々のライフストーリー』, 明石書店

Studying the Significance and Challenges of Evocative Writing in the Human Sciences Through the Practice of Autoethnography and Self-Description

Yusuke KATSURA and Izumi CHIBA

Since the 2000s, the number of academic articles using autoethnography that have been published has increased significantly, predominantly in the United States. Autoethnography can be classified in two ways: "evocative," which describes the writer's subjectivity and emotions without hiding them, and "analytical," which has a higher affinity with "traditional" academic research. Carolyn Ellis and Art Bochner , the driving forces behind autoethnography, placed the former — evocative autoethnography — at the core of their work.

In Japan, research using autoethnography has gradually begun to be conducted, but most studies are analytical in nature and rarely evocative. This may indicate that the full range of autoethnography methodologies has not yet been explored in Japan. This paper highlights the implications and difficulties of evocative writing in the human sciences in the Japanese context, where the traditional positivist paradigm is still dominant.

First, we consider the development of autoethnography in the United States and the initial controversy between the evocative and analytic approaches.

Second, we review the current use of research methods in Japan and confirm that although autoethnography has started to spread, few evocative descriptions could be found. In other words, autoethnography continues to be mostly limited to the analytic approach.

Next, we discuss why undergraduate and graduate students are interested in autoethnography, based on the narratives shared in autoethnography workshops. Our findings reveal the necessity and significance of self-description for not only "honest" research, but also including perspectives that have not been adequately captured previously. However, the traditional positivist paradigm that persists has led to hesitation about self-description. Methods of description are also discussed, including how to describe past experiences and the extent to which creative work should be incorporated. Other issues regarding autoethnography are also raised, such as whether descriptions by authors who have overcome suffering may be potentially harmful to readers who are still suffering.

We then analyze the motivation for evocative and autobiographical writings and the difficulties and significance of self-descriptive writing for faculty in the human sciences, based on Izumi Chiba's recently published self-description and the reader's comments.

We argue that existing academic rules prevent even faculty members from engaging in evocative writing and that approval by the fellow faculty members leads to the relativization of traditional rules.

For Chiba, the description of past negative experiences not only reconstructs and heals the self but also provokes a self-narrative for the reader. We suggest that composition, like artistic creations, presented with a clear and honest description, are not opposed to each other, but are complementary and multi-layered in nature.

Comments from other faculty members about Chiba's self-description also indicate that evocative writings can be an opportunity for critical examination of academic premises. Evocative writing has not yet been fully discussed and explored in Japanese academia but opens up a rich area of research that has been excluded from the human sciences until now. Moreover, its content has the potential to be perceived as an honest and credible narrative.